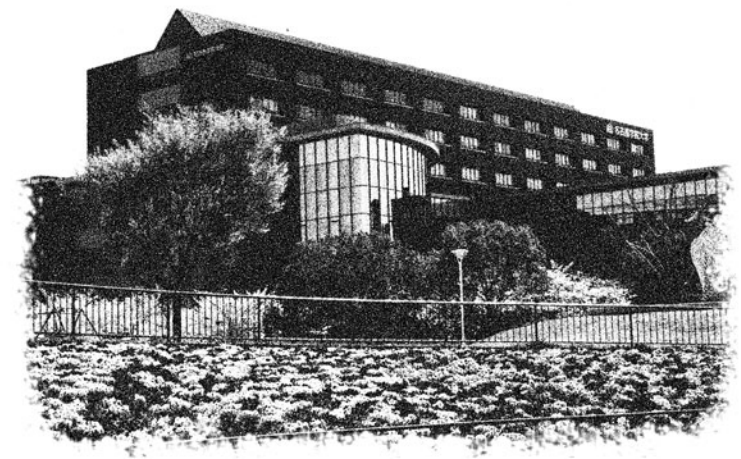


チャペル ブックレット No.16

# 地球に、そして日本に生まれて今ここにいる

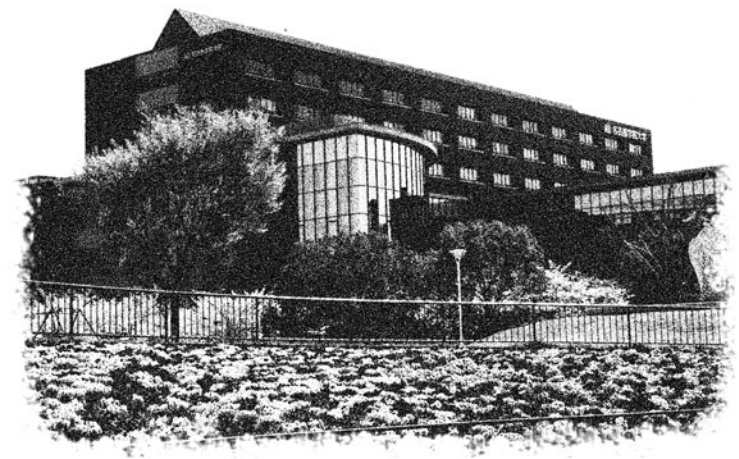
太田 信吉



チャペル ブックレット No.16

地球に、そして日本に生まれて今ここにいる

太田 信吉



名古屋学院大学 宗教部

## 地球に、そして日本に生まれて今ここにいる

太田 信吉



おおた のぶよし  
**太田 信吉**

愛知国際病院副院長

- 1954年 愛媛県に生まれる
- 1979年 長崎大学医学部卒、外科、消化器外科を専攻
- 1994年 愛知国際病院に勤務、外科、ホスピス医として働く
- 1980年 長崎にて受洗し、現在日本基督教団瀬戸永泉教会会員

私はクリスチャンで外科の医者をしています。「名古屋学院大学の宗教講演会でキリスト教のお話をお願いします」と言われたとき、何について話そうかと思ったのですが関係する資料として聖書を選びました。皆さん、聖書を読んだことありますか？

聖書の一番最初は創世記です。創世記には、今の科学からすると何だろうって思うようなことがたくさん書かれています。しかし地球の実際の歴史に近いこともいろいろ記されているのです。

最初に神は天地を造り、その後植物や動物などを造り、最後に人間を造られました。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は創造した人間にそう言いました。

そしてこうも書かれています。神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。

つまり神様が植物や動物を支配する権限を人間に与えたと書かれてあるのです。これって不思議なことだと思います。私たちは誰にこの地球を支配する権威を与えられているのかと考えるとき、旧約聖書の創世記を書いた人たちが、神に与えられたと述べているのはすごいことだと思います。

そして私たちの地球に対しての一番根本的な考え方が創世記2章のあたりに書かれています。私たちがどうしてこの世に生まれてきて、何故生きているのかということです。人間が善悪を知る力を得たことにより、地球の歴史である46億年の最後の3千年から5千年の歴史を生きている人類にいろんなことを知ることが出来るようにして下さったのです。で、そう考えたときに、私たちは地球に対して責任があるということを考えていかなければいけないと思います。地球に対して、私たちには大きな責任があるのです。

ほかにも旧約聖書はいろいろ参考になる物語がありまして、たとえばノアの箱船物語が創世記に出て来ます。ノアの箱船が辿りついた山が、ロシアかどこかの

山だと言って、今でもそれを信じて探している人がいると聞きます。私は、見つかったもおかしくないと思うのですが、昔も大洪水があって、多くの人が死んだことを聖書は語っています。

それから、バベルの塔の物語も聞いたことがあるかもしれませんが、人類は最初みんな同じ所から生まれて、同じ言語をしゃべっていたのです。でもだんだん人間は知恵があるから、高い塔を作って天まで届くくらいの塔を作って、人間が神に近い存在だぞって示そうとしました。それを見た神様が何をしたかという、みんなの言葉をつながらないようにしたのです。それぞれの地域の言葉にして話を通じなくて力を合わせる事が出来ないようにすれば、力が分散されるからという話なのです。言語を考えた時、もとは一緒かもしれないと思います。たとえば英語で名前はNAMEです。これをローマ字で読むとナメですから日本語のナマエと似ているでしょ。それから、ネパール語で名前はナムです。言語って全く違うように思うかもしれないけど、実はそうやって考えると世界には似た言葉がよくあるのです。

また旧約聖書にはヨブ記というのがあります。この物語は何かと言うと、ヨブという神様に忠実な人がいたのですがあるとき悪魔は、ヨブが神様に忠実なのは、恵まれた豊かな生活をしているからで、財産を奪ったり体を痛めつけたりしたら、きっとあなたに背きますよと神様に話したのです。そこで、神様はヨブに試練を与えたのですが、基本的にヨブは神様に背きませんでした。いっぱい辛いこともある。でも、辛いことがあっても、それでも神様に生かされているんだって、そういうたとえがこうして聖書にはあるのです。このように、旧約聖書には、今の時代にも参考になる様々な物語がたくさん書かれています。

次に新約聖書に登場しますキリスト教の根本的な話を少ししておきましょう。イエス・キリストの生き方には先ほどの旧約の世界で語られていた多くの物語と考え方が少し変わっているところがありました。何が変わったかって言う一言で言うと、旧約の世界は生きていくためにどうしたら生きていけるかって話だったのですけれど、質の変換が起ったと考えてもいいと思います。それは何かというと、「あなたたちは、一人で生きていくわけではないよ。他の人と一緒に生きていくんだよ。」ということです。だから、たとえば旧約聖書の十戒にはいろんな教えがありますが、基本的にイエスはそれを次ぎのようにまとめられました。

イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽

くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

イエスは十字架にかかって人類の罪のために死んでくださいました。なんで十字架にかかって死んだ人が神様なのって一般的にそう思いますね。でも、実際私たちは、最初に言ったように地球のいろんな生物であるとか、そういうものをあなたたちが支配をしていいよ、あなたたちが、ちゃんと責任をもって守っていきなさいと言われていたのに、自分の利益とか、自分の利害であるとかそういうことを中心にしてしまうことが、私たちの生き方になってしまっていたのです。

それに対して、イエス・キリストの愛は無償の愛なのです。この教えを広めた弟子の一人であるパウロという人が書いたヨハネの手紙のなかに、「互いに愛し合いましょ。神は独り子を世にお遣わしになりました。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。神は独り子をお遣わしになりました。その方によって、私たちが生きるようになるためです。ここに、神の愛が私たちの内に示されました。」というところがあります。イエス・キリストを通して、神様の愛が実現したというわけです。ここで旧約聖書から新約聖書の大きな変換があるわけです。イエス・キリストが十字架にかかれたことは、旧約聖書の一番始めの出だしのところで犯した罪というものを贖って下さったことなのです。旧約的な生き方、つまり自分のためにただ生きるという生き方から、他者への愛のために生きることをイエスは教えてくださったのです。

実際、イエス・キリストに倣って自分の生を他の人たちのために生きた人がたくさんいます。そんな人々のことを少し紹介しておきましょう。

マザーテレサもその一人です。この人はポーランドに生まれてインドに行って、貧しい人たちが死にゆくのを見守りました。インドですからカースト制がありますが特に下の階級の人たちのケアにたずさわりました。そういう人たちに対して、人間らしく最後の時を迎えさせてあげるということをされました。あげたというよりは、そういう人一人一人のなかにイエス様、神様がいらっしゃると思いがながらされたのです。すべての人が神様によって愛されているってことは、どの人も同じように存在している価値があると思ったから、彼女にそれができたと思うのです。

マザーテレサが赤ちゃんを抱いている姿は、カンガルーケアって総称して言えるものです。カンガルーってお母さんが赤ちゃんをお腹の中に抱きかかえ大きくなるまでずっと抱きかかえていますよね。それで、育てていくのですね。それは本当に愛おしい。その小さな、小さな子どもを、愛おしむそれと同じしかたで、

マザーテレサは人を愛し自分の生涯を捧げられました。ただ生きたのではなく、他者への愛のために生きたのでした。

それから、あまりみなさんご存知ないかもしれませんが、コルベ神父という、神父様がいました。この方もポーランド人です。日本にも来ておられたのですが、戦争中にアウシュビッツに連れて行かれました。アウシュビッツというのは、ユダヤ人を殺す目的で作られた収容所で、毎日10人くらい番号で呼び出され、餓死室に入れられたそうです。この神父様は呼び出されなかったのですが、呼び出されたひとりの人が、「自分は妻もいるし、子供もいるから死ねない」というふうに言ったときに、この人は「私は神父だから子供もいないし家族もいない。私が代わりに行きましょう」と言ったのです。

さて普通は餓死室に入れられ、食べ物を与えられない状況でそこから「出してくれ！」と叫ぶのが普通の人間の心情でしょうが、そのときの10人の人たちは、神父様がいたので、讃美を歌ったり祈ったり、静かな時間を過ごしていたんです。二週間たっても神父様を含めて4人の方たちは、何も食べない状態の中で生きていました。二週間何も食べないで生きていたら、当時のドイツ人には怖いことでしたよね。で、結局薬を注射するっていうことになりました。普通は嫌だと拒否するのですがこの神父様は、自らの手を出してあなたがそこで苦しまないようにと自ら死を選んだというのです。この方にはいろいろ裏話みたいなのがあって、神父になる前にマリア様に出会ったという逸話もあります。プロテスタントではあまりしない話になるかと思いますが、マリア様が、「あなたは白い花の冠と、赤い花の冠、どっちを選びますか？」という話をしたとき、両方くださいと言ったそうです。白い冠は聖職者となり清い生活をする。赤い冠は血の意味があり殉教によって命を落とす。その様に意味するものだったのだそうです。実際に受難の道を歩んだ方なのですが、人のためにそういうことができたのは何故？ どうしてだろう？ と思いますよね。どこに自分の命を捨てても、他の人が救われたほうがいいって思える人がいるのでしょうか。神父様が身代わりになった方がその後94歳まで生き続けられました。そして、コルベ神父様が自分の代わりに亡くなったという話と、二週間経っても死ななかったという話を、世界各国をまわってされたのです。このコルベ神父様の生き方も、ただ生きたのではなくてまさにイエスに倣った愛の生き方であったと思います。

次にこの写真の人はジャン・バニエという方ですが、今も生きておられます。カトリックの方でカナダ人です。ある時フランスの友人であるトマス神父という

方から、友達が出来たから会いにいらっしやいということで、会いに行ったことから始まりました。友達というのが、実は障がい者の方だったのですね。すごく心を病んでいて、他の者を受け付けないそういう状態でした。彼らの二人の生活が始まり、互いに信頼する暖かい関係が生まれました。彼は、そういう人達が尊ばれない世界ではなくて、生きていける世界を作りたい。そう願って、障がい者とともに生きるということを考え、ラルシュという共同体を作り、現在世界中に広がっています。ラルシュってというのは、フランス語でノアの箱舟の意味なのです。ラルシュ共同体のマークには、箱舟のマークが使われています。そのラルシュでは、人と人とはそれぞれ違うっていうことを基本にしています。そして弱い人の中に存在するものが大切にされています。資本主義社会では、試験をやって、競争をやって、そして勝ち残っていく。そして、いい会社に入るか、給料を高くもらうか、いい生活をするか、それができない人は落ちこぼれっていう、そんなことをいつも突きつけられます。私達は他の人と競争して、勝ち残っていく社会を作っているのです。弱い者は生きていけない世界を実は作っているのです。最近ハンディキャップとかそういうことで言われますけど、弱い人の声というのはなかなか聞かれません。ところが、反対にもしこの世の中で弱い人が一番大切にされる世界を作ったとしたら、私達が失っていたものが大切にされる世界になるのではないのでしょうか。もう一つは、弱いという基準は、何の基準で成り立っているかということ。勉強ができるとかできないかという基準と違うものです。神様との関係で言うと、神様から生かされていると感じる心が閉ざされているかどうかという基準ではどうでしょう。そうすると、弱い人は感受性っていうかですね感じる力が逆にすごく敏感になっていていつも神様の声が聞けているかも知れません。反対に優秀と言われる人は、聞く耳を閉ざしてしまっているかもしれません。試験で良い成績をとるかとかといったときに一番になりたいって誰でも願いますよね。でも一番になりたい人のために、自分は二番でもいいと思うその考え方をよしとするかどうかです。でもなかなか、そうはならないですよ。私たちの心の中にそういう心は出ないですね。一番でなくてもいいよってことの中には、弱い者を大切にするという心があると思います。それは、最初に言いましたイエス・キリストが十字架にかかって、弱い人のため、愛のために死んでくださったという出来事に通じることだと思います。

人に対しての思いやりであったりとか、感じる心であったりとか、そういうことに気がつく世界があるんだよということ、ジャン・バニエという方は、何度

も語って下さいました。でも、それはあなた自身も大切だよ、この世の中で、邪魔ものとされているような人たちも、みんな同じように大切にされているんだよってことが、その共同体のなかで実現しているので、互いが違うということ当たり前のこととして、お互いに認め合っています。ところが、人間というのは生きていく中で争いをずっと続けてきました。地球にイエスが生まれて、福音を宣べ伝えた後もキリスト教とイスラムの世界であったり、あるいはキリスト教のプロテスタントとカトリックの間であったり、どうしてそんな争いをしないとイケないんだと思ってしまいます。

1945年の8月9日、長崎に原子爆弾が落とされました。その3日前の8月6日には広島に投下されました。私達は、善悪を知る木から実をとったために、善だけでなく悪も含むいろんなことを学びました。でも、その知恵のお陰で何をやったかという、原爆を実際に落としてしまったのです。その原爆で多くの尊い命が失われました。カトリックの浦上天主堂でもたくさんの方が被害に合われました。皮肉なことに浦上天主堂のあたりは長崎の中でカトリックの信者がいっぱいいたところなのです。ですから、アメリカはキリスト教の国でありながら、平和を望んでいるキリスト教の人たちを原爆で殺してしまったのです。それに対して、有名な永井隆博士や浦上天主堂の信徒で生き残った人たちは、原爆は一体何なのか？ 神様が私達に下した罰なのか？ 私達は、そのことを覚えて、悔い改めて生きなければいけないと祈っておられました。永井博士自身は、多くの著書を残して被爆10年後白血病で亡くなりました。私は、実はもう一人の医師を知っています。秋月辰一郎さんといって、私が長崎にいた頃は、聖フランシスコ病院の病院長をされていて、様々なことを教えていただきました。秋月先生は、もともとは仏教を学ばれていました。原爆の被害に合わながらも浦上第一病院という、今のカトリック聖フランシスコ病院なのですけど、原爆で被災した患者さん達をそこで治療されました。一緒に働いたシスターや修道士の人たちの献身的な働きを見て、人に尽くすことが、どうしてこんなにできるのだろう？と思う中で、その人たちの自分への思いも感じられて自分自身もカトリック信者になられたのです。秋月先生は反核と言って、原爆を世界中から無くさなくてはならないという運動をずっとやっておられました。それは、ご自身が被爆して被災した中で、こんなものを作ってはいけないし、世界中に原爆が存在しているほうがおかしいのだと言っておられました。人間は原爆なんか作って何をやっているのだということを、伝えたかったのですね。

今、地球にある核爆弾は2万個から3万個。地球を何回滅ぼせばいいのだからくらいあります。抑止力という話をする人もいるのですが、もし一発使われたら水素爆弾ですから、長崎に落ちた原子爆弾なんかよりもっと被害は大きく大変なことです。そういうものが、世界中に存在しています。ですから人間は一体何をやっているんだということです。原爆を落としたということは、私達人間はこの世界を支配することを神様から任されているながら、その知恵を使って地球を破壊している。やっていると間違っていることに気がつかないとしたら、原爆のようなものは要らないのだと言っていかないとしたら、私達は、ノアの箱船の時の大洪水のように滅びることになるかもしれません。人間は自ら滅びる道を歩んでしまうのでしょうか。「宗教とかそういうことを関係なしに、核というものを無くさなくてはいけない。そのために自分は生かされたのだ」と先ほどの秋月先生は語っておられました。

反核医師の会という会が長崎にあり、秋月先生はその会合の帰り喘息の発作が起き、意識不明になって植物人間となり、寝たきり状態で13年間生きられ、2005年に87歳で亡くなりました。ちょうど被爆60周年の年で、「NAGASAKI 1945 アンゼラスの鐘」というアニメができました。たまたま私が、秋月先生の話をして人にしたときに、こういうアニメがあることを知りました。私もまだ見てなくて、DVDでも見られるだろうと簡単に考えていたのですがDVDは結局ありませんでした。だから、映写会をやらないと見られないので、私の知っている方が、なんとかこのことを実現したいと、働いて下さって、今年の8月14日のお盆にウィル愛知でこの映写会をやることになりました。どんな映画かという、秋月先生たちが、原爆が落ちたとき希望を持ちながら患者さんの世話をした歩んだ話をアニメにした映画です。ある意味、これは反戦の映画で私達にこのことを忘れてはいけない、前向きに生きるために、今でも核に対して、世界中で残っている核を廃絶するために、私達は働いていかないとイケないと伝えるもので、原爆を経験した人間だけではなくて、神様に対して忠実に生きようとしている人に重要なメッセージを送っていると私は思います。

私達はすごく便利な世界に生きています。ですけど、私達が作って来た社会は、イエス・キリストが歩いてこられた社会からすると、実は、競争の中で人を蹴落としていくような世界です。そういうふう思うのです。でも私達が作った世界だから、努力すれば変えることも出来るのでないでしょうか。アシジの聖フランシスコという方の「平和の祈り」という祈りがありますが私の好きな祈りの一つ

です。基本的に、人と関わりながら生きるということが大切なことを教えてくれている祈りであります。

「平和の祈り」

主よ、私を平和の器とならせてください。

憎しみがあるところに愛を、争いがあるところに赦しを、  
分裂があるところに一致を、疑いのあるところに信仰を、  
誤りがあるところに真理を、絶望があるところに希望を、  
暗やみのあるところに光を、悲しみのあるところに喜びを。

ああ、主よ、慰められるよりも慰める者としてください。

理解されるよりも理解する者に、愛されるより愛する者に。

それは、わたしたちが、自ら与えることによって受け、赦すことによって赦され、自分のからだをささげて死ぬことによってとこしえの命を得ることができるからです。

争いのない世界を作るにはどうしたらいいか。それは、自己中心ではなくて相手のことを考えるということをしていったとき、それが平和な世界を作ることができるのだということを、この祈りは伝えていていると思います。

最近、私は人から聞かれました。「先生、原子力ってどう思う？」って。皆さん、どう思いますか？ 私も最近までは、二酸化炭素を増やしちゃいけないし、原子力も必要だと思っていました。でも、実は今回の東日本大地震で考えさせられたのですが、地震も津波も人間にはコントロール出来ないのです。10メートルの堤防を作ってもそれを簡単に波は乗り越えました。千年前にもそんな大きな津波が来たらしいです。でも、もっと前には40メートルもある大きな津波が来ていたかもしれません。恐竜が絶滅したときユカタン半島に惑星が落ちて、そのとき何が起こったかと言うと、おそらく推定としてはアメリカ全土が水で覆われるくらいの大津波が来たのではないのでしょうか。恐竜が絶滅したというくらいですから。私達の知らない中に、私達の力を超えたものがいっぱいある。そう考えた時に、原子力というエネルギーを作ることが出来たってことは、人間の知恵なんでしょうけど、でも、もしそれが一度爆発してしまったり、核融解が起きてしまったり、人間にはコントロールが出来ないと今回教えられたと思います。

イタリアでは国民投票で、原子力はいらないという決断をしました。私達がコントロールできない物にちゃんと答えを持っていかないといけないと教えられた

ように思います。それは、神さまに世界を任されている私達が自然に対して大きな責任があるからです。

また石油は30何億年をかけて地球が貯めていたものですが私達はそれを100年かちょっとの間に使い切ってしまうとされています。科学としては地球の歴史は知っていますが、神様から私達に権限が与えられている以上、それを守ってことも、私達はしていかなければならないと思います。そうするといったいどうすればいいのかとなったとき、今の便利な生活も少し元に戻さなければならぬ、そんなことを考えていかなければならないと思うのです。

最近、ブータン国の話を聞いたとき、こういう国があるのかと驚きました。ブータンは国民総生産からすると、世界で130番目か140番目かという国なのですが、「幸福と感じますか？」という国民幸福度指数を前の国王がやったとき多くの人が「幸福です」と答えました。97%の人が幸福と言っています。生活は、日本と比べたら便利とは言いがたいのですがたとえテレビが無くても、幸せだと思える世界なのです。ブータンの国の人は、人数的には何百万しかいない小さな国だけど、そこでは自然に囲まれて健康的で平和な生活が出来るのが幸せだってふうに思っているのです。

私達もそういうことを考えなければいけないと思います。日本は、戦争があっただん底を味わいましたが経済的には世界トップクラスに成長しました。世界から日本の復興はすごい、日本は大した国だと言われて素直に喜びました。でも、誰のためにやって来たのかと言ったとき、世界の国の為にとやって来たのでしょうか？

自分たちの生活を良くすることは一生懸命にやって来ました。逆にいうと、自分達の利益を上げるためアジアの国に行き、アジアの国の人達の安い労働力を得て、自分達の生活をよりよくするために、がんばって来たのです。そのことに対する反省というのも少しずつ出て来ていますが、あらためて私達自身の本当に豊かな意味での生活というのにどこかで切り替えていかなければ、自分達の歩みを間違えてしまうのではないかというふうに、聖書の創世記を思いながら考えるのです。私達は地球に生まれて来て、たまたま今の時代に日本に生きていて、何をなすべきかが問われていると私は思うのです。

それでも私達はなかなか欲が深いところがあって、これも最近テレビでやってきた医学的な話なのですが、長寿遺伝子というのを聞かれたことがありますか？

100歳でも元気な人達の遺伝子と言うのは、活性化された遺伝子があるという話です。その遺伝子は、誰でも持っています。その遺伝子を活性化させるため

にどうしたらいいのかというと、実は今食べている食事を30%減らしそれを3ヶ月続けたら、長寿遺伝子は活性化されて、長生きできるということなのです。3ヶ月間食べる食事を3割、ケーキを食べるにもケーキを1/3。テレビで紹介していたのは、普通のショートケーキを1/4に切って食べるようなそういう姿を映し出していました。実際に3ヶ月たったら、遺伝子が活性化されているのです。体重も減っています。ところが、この長寿遺伝子は、100%の量のもとの食事をしたら消えるそうです。

実はこれは飢餓遺伝子なのです。人間が飢餓状態のとき、生き残っていくために獲得した遺伝子です。なので、食事が豊かになるともういらなくなるから、休んでしまうのです。じゃあ100歳まで生きるためにはどうしたらよいか？ ずっと3割減の食事を100歳まで続けることです。それはほとんどの人が嫌がります。美味しいものを食べて生きたいから。そこで人間はずる賢いので、それでは長寿遺伝子を活性化させる物はないのかと調べました。調べて、ポリフェノールの中の一つがそういう働きをもっていることが判明し、サプリメントが出来ました。美味しいものを食べて長生きしたい。人間は欲が深いと思います。

またヒトの遺伝子を解析することに10年位前は、全世界の科学者が寄り集まり数年かかっていました。ところが今は、機械を使って一時間ちょっとでヒトの全遺伝子が分かるようになりました。そして、正常な人と比べてあなたの遺伝子はここが違いますと調べることが出来るのです。唾液の中にある細胞を取って調べることで、分かるようになりました。それで、あなたはひょっとしたら、大腸がんになるかもしれない。将来、大腸がんになる確率は50%ですとか、心筋梗塞になる確率は60%ですとか、女性だったら乳がんになる確率が60%ですとか、そういうことが分かるようになったのです。どうしますか？ あなたが60%で大腸がんになると言われたら、大腸を全部取っちゃいますか？ 生活を変えますか？ がんも生活習慣病と言われているので、食生活を変えて、肉を食べなくしたり、野菜中心にしたりとか、そういうことをするってことはプラスになります。心筋梗塞になる人は、肥満からダイエットして痩せて心臓に負担にならない生活をしたり、血圧をコントロールする薬をちゃんと飲んだりとかするようになるでしょう。

私が今日、創世記の話をしたのは、私達は生命の尊厳に関わる部分において、どこまで私達にやることが許されているかということに答えを出していかないといけないと思っているからです。何故なら原子爆弾を作った人間ですから、人間

を破壊する、人を殺す道具を作った人間ですから、科学が進む中で自分が生きるためには何をやるか分からないのです。間違えば人類全体ではどんどん破滅の方向にすすんでいくかもしれません。私達は、やりすぎに対しては警告を出していかないといけないと思います。便利な世界になった部分だけ、危険な世界に入っている面もあるのです。そのことをあらためて、考えて頂けたらと思います。くり返しますが、神さまからこの世界を任せられている私たちは責任があるのです。ただ生きるだけでなく、イエス・キリストの歩まれたような愛に生きる必要があるのです。

最後に、先程のジャン・バニエが作っているラルシュという共同体の話をもう一度します。ダウン症という病気をご存知ですか？ 生まれてくるときに遺伝子が一部多いのです。特に高齢者の女性から生まれてくる可能性の高い子供たちです。ジャン・バニエさんは、フランスにいます。フランスでは、遺伝子診断が生前にされるので危険な要素がある人はチェックされ、ダウン症という診断がついた場合、中絶されることが多くなっています。だから障害を持って生まれて来る子はすごく減って95%くらいは生まれて来ません。生まれてくるのが出来るのに生まれて来ない。なんででしょうね。私達は、そのことに対して警告をとるよりは、本当にそれでいいのだろうかとか疑問を投げかけなければならないのではないのでしょうか。遺伝子診断は、名目上は治療ですが実際は弱い人が生まれて来ない世界を作ることになります。みんなが画一化されてある程度能力を持った者だけが生きる世界を作ることになります。

イエス・キリストが、「すべての人を神様は愛しています。だから互いに愛しなさい」と言った世界からするとちょっと違う世界ではないでしょうか。私達は、経済の発展する中で、いろんな便利なものを手に入れましたけれど、そのことを今日聖書の創世記を学ぶ中で振り返るきっかけになればいいと思って話をさせていただきました。医学も進歩しましたし、私達が正しくそれを使って人の為に行なっていくのは、すごく大事なことです。出来たら、人の為他人の為に生きる社会を作り上げてゆきたいものです。神様が造られた地球の今日本にいる皆さんに考えてほしいことを色々話させていただきました。自分だけでなく隣人のために生きることはとても大切だと思います。名古屋学院大学のキリスト教の精神はそこにあるわけですからそのことをいつも覚えて、真の学びを続けていってほしいと思います。

2011年6月21日(火) 名古屋学院大学宗教講演会



## 参考資料

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。神は、光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

神は言われた。

「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」

神は大地を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

神は言われた。

「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」

そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」

そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

(旧約聖書 創世記1章1節～13節)

神は言われた。

「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」

神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」

夕べがあり、朝があった。第五の日である。

神は言われた。

「地は、それぞれの生き物を生み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」

そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を創ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

神は言われた。

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

(旧約聖書 創世記1章20節～29節)

# 地球に、そして日本に生まれて今ここにいる

太田 信吉

チャペルブックレット No.16

---

2012年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部  
〒456-8612  
名古屋市熱田区熱田西町1番25号  
TEL 052-678-4096

印刷 佐川印刷株式会社